

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究
分担 研究報告書

患者向け冊子「炎症性腸疾患の手術について Q&A」

研究協力者 長堀 正和 東京医科歯科大学 消化器内科 特任准教授

研究要旨：様々な内科治療の進歩にもかかわらず、炎症性腸疾患の治療において、現在でも、外科治療は内科治療と同様に大きな位置を占めている。多くのクローン病患者では、生涯において、少なくとも一度は外科手術が必要とされており、また、潰瘍性大腸炎患者においても、重症例だけでなく、長期経過例では dysplasia および癌の合併により、外科手術を要する患者は決して少なくない。一方、患者の視点からは、外科手術に対する心理的抵抗は大きく、「患者が手術を拒否した」は日常臨床でよく耳にするフレーズである。一方、内科医の側の問題として、外科手術は「内科治療が不成功に終わった場合の最終手段」といった誤った認識もあり、患者が適切なタイミングで外科手術を受ける際のバリアになっている。従来、炎症性腸疾患の外科治療について、患者の理解を助ける患者向けの情報は乏しく、また、内科医が、外科治療についての情報を患者に正しく伝えるためのツールも乏しい。従って、このような目的を達するための患者向け情報冊子「炎症性腸疾患の手術について Q&A」を作成した。

共同研究者

畑啓介（東京大学腫瘍外科）

内野基（兵庫医科大学炎症性腸疾患学講座外科部門）

東大二郎（福岡大学筑紫病院外科）

水島恒和（大阪大学消化器外科）

木村英明（横浜市立大学附属市民総合医療センター IBD センター）

高橋賢一（東北労災病院大腸肛門病センター）

小金井一隆（横浜市立市民病院炎症性腸疾患科）

杉田昭（横浜市立市民病院炎症性腸疾患センター）

鈴木康夫（東邦大学医療センター佐倉病院）

もつ専門の外科医師からなる作成グループを作り、日常診療において、患者から多く寄せられる質問を基に、Q&A 形式からなる冊子を作成した。内容は、潰瘍性大腸炎について、手術率、手術適応、術式、術後合併症、術後の生活などに関する 6 項目、クローン病について、再手術や再発予防なども加えた 8 項目、また、術後の痛みや、妊娠・出産および人工肛門に関する 4 項目、計 18 項目の Q&A を掲載した。また、外科手術や解剖に関する用語は、患者にとって理解が難しいものも少なくないため、これらの用語を解説し、Q&A の理解を助けるための、「外科手術用語集」を巻末に掲載した。

（倫理面への配慮）

特になし

A. 研究目的

手術が検討される炎症性腸疾患患者において、外科手術について理解を深めると同時に、主に内科医が患者への説明する際の補助となる小冊子の作成を行う。

B. 研究方法

炎症性腸疾患の外科治療に多くの経験を

C. 研究結果

本冊子（図 1）は、「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」班の Web ページ内

の「患者・家族情報」のページ
(<http://ibd-japan.org/patient/>) から、
アクセス制限なく、閲覧、ダウンロードが
可能である。



図1 「炎症性腸疾患の手術について
Q&A」(表紙)

り、広く全国の炎症性腸疾患患者の予後およびQOLの改善に寄与できると考えられる。

F. 健康危険情報
なし

G. 研究発表
1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む)
1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

D. 考察

本冊子を利用していただくことで、患者が炎症性腸疾患の外科手術について理解を深め、適切なタイミングで外科手術が行われ、患者予後およびQOLの改善につながると考える。Web版であることの利点として、改訂および掲載が容易であるため、掲載内容について、今後、新たな情報が得られた際には、速やかに改訂を行っていく予定である。

E. 結論

「炎症性腸疾患の手術について Q&A」を作成した。本冊子は、「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」班のWebページにて、アクセス制限なく閲覧可能であり、また、ダウンロードもできるため、医師から患者に冊子として手渡すことも可能であ